

2021年 6月 6日(日) 関東学院教会 主日礼拝 説教要約

説教 「『天の国』のことを学ぶ」 マタイによる福音書 13章44-52節 高橋彰

◆「天の国」のたとえ

1344 「天の国は次のようにたとえられる。畠に宝が隠されている。見つけた人は、そのまま隠しておき、喜びながら帰り、持ち物をすっかり売り払って、その畠を買う。45 また、天の国は次のようにたとえられる。商人が良い真珠を探している。46 高価な真珠を一つ見つけると、出かけて行って持ち物をすっかり売り払い、それを買う。47 また、天の国は次のようにたとえられる。網が湖に投げ降ろされ、いろいろな魚を集め。48 網がいっぱいになると、人々は岸に引き上げ、座って、良いものは器に入れ、悪いものは投げ捨てる。49 世の終わりにもそうなる。天使たちが来て、正しい人々の中にいる悪い者どもをより分け、50 燃え盛る炉の中に投げ込むのである。悪い者どもは、そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。」

◆天の国のこと学んだ学者

51 「あなたがたは、これらのことがみな分かったか。」弟子たちは、「分かりました」と言った。52 そこで、イエスは言われた。「だから、天の国のこと学んだ学者は皆、自分の倉から新しいものと古いものを取り出す一家の主人に似ている。」

聖書 新共同訳(C)日本聖書協会 Japan Bible Society, Tokyo 1987, 1988

わたしたちが「旧約」と呼ぶヘブライ語聖書第一巻目の創世記は「最初に、神は天地を創造された」(創世記1:1)と始まります。この短い一句からでも、豊かな思索を与えられます。神が創られたわたしたちが生かされている世界は、わたしたちの目に見えて今生きている現実の「地」と、わたしたちが今見えていて手にしているところではない領域の「天」があることを想像させます。2章でも「主なる神が地と天を造られたとき」とあります。「地」はわたしたちが生きる領域とすれば、天はそうではない領域です。そしてそれは現実と希望と言いかえてもよいように思います。神はわたしたちに生きる現実の領域の助け支えと同時に、最初から天という希望の領域も与えてくださっています。神を信じて生きるとは、自分がいま生きている領域にも神の備えや働きかけがあることを信じると共に、わたしたちが生きる現実の領域を超えた希望を神が用意してくださっていることを信じて、希望をもって生きるということです。

「天国」と言うと、この世の命を終えた後に迎えられるところというイメージを持つ人が多いだろうかと思います。最近わたしも周りで親しいかたを送ったり、親族を亡くした方の知らせを聞いたり、同級生が突然天に召されたりという悲しい出来事が続きました。この世を去り、もう目には見えず、会うことが出来ない人が天にいるという想像をしたりします。そうすると、天国が遠い所ではなく、なんだか近い所になってくるようにも、しみじみと感じられます。再会の希望は淋しさや悲しみを慰めてくれます。そうした想像をすることも神は許してくださるとわたしは信じています。

マタイによる福音書でマタイが「天の国」と書いているのは死後の世界を指すではありません。「神の国」、神の支配領域です。天地を造られた神が、天において神のみ心が全く成就されているように、地においても(わたしたちの生きている領域においても)神のみ心が行われるように、祈りなさいと、イエスはわたしたちに「主の祈り」を教えられました。天の国はわたしたちの生きている領域に到来しています。それはこの世に来られたイエスによって教えられ実現されると、福音書は伝えるのです。イエス・キリストに出会い、イエスの教えを知り、イエスによる救いを信じる者たちは、この世に生きながら、神の愛、喜び、希望を与えられて生きるのであります。

今日の3つの譬えはマタイ福音書にだけ記されているものです。13章の一連のキーワードが重ねて用いられており、前の譬えと共に通するテーマがあるのに気づかれます。ひとつは「隠す」です。天の国は見せびらかされて力をもって到来しているのではなく、静かに、ひそかに始まっています。それはイエス・キリストを信じた人びとが伝えたことでした。そして力と栄光を帶びてやって来ると期待していた人達にとっては期待外れの驚きだったことでしょう。ですから、拒否され、否定され、天の国を伝える福音は迫害さえされたのです。

畠の宝の譬えは、天の国との突然の出会いを語ります。人生で思いがけない、貴いものとの出会いがあります。見つけた人は「持ち物をすべて売り払って」発見した畠を買います。出会いはその人の生き方を転換させ、そこに身を投じることを生じさせます。人生をかけるほどの素晴らしさがあります。もう一方で真珠を探す商人の譬えは、ずっと求めて来たものとの出会いを語ります。求め続けてきたからこそ、その真の価値を知るセンスも磨かれて来ています。そしてこちらも「持ち物をすべて売り払って」その真珠を買います。天の国、神の支配の到来、真理と言いかえてもいいかもしれません、その出会いは、思いがけない形で、またずっと探し求め続ける中で見出す形で、起こります。どちらの可能性もあることは恵みではないでしょうか。ここでは、その出会いに身を投じてそれを掴んで生き始めることが大事だと教えられます。天の国、神の真理はわたしたちを一つの生き方に投入させるしかたで恵みを与えるのです。

使徒言行録を読むと、9章のサウロ(後のパウロ)のように突然にイエスの呼びかけによって神との出会いをする人が紹介されます。しかし同時に8章では長く神を求めて旅をつづけたエチオピアの高官のような人も登場します。天の国、イエス・キリストとの出会いの恵みは多様です。また、これは一人の人にどちらも起こることでもあります。網の譬えは毒麦の譬えに共通する内容が、用いられている用語からも想像されます。

古いものが新しいものを解き明かす緊密な関係を持っていると教える学者はマタイの姿であり、主の弟子たちが旧約を破棄しないでイエスの救いの真理を知るべきことを教えます。